

---

# 愛と勇気の騒楽話

嶺上

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛と勇気の騒楽話

### 【Nコード】

N6424U

### 【作者名】

嶺上

### 【あらすじ】

ネギ・スプリングフィールドという少年が居た。英雄の息子として周囲に期待され、それに応えるように成長していく少年。しかし、彼は知らなかった。彼の生きる世界は、既にとある転生者によって大きく変えられていたのだ……！

彼が望む望まないに関わらず、周囲は無闇に優しくったり、親しみを込めた嫌がらせを敢行してくる中、彼は立派な魔法使いになるべく奮闘する。

これは、そんな少年を中心とした騒々しくも楽しい話である。多

分。

本作は、作者の前作である「言葉と意思の行軍記（ncode・s  
yosetu・com/n7797n/）」の設定を引き継いだ続  
編となります。

## 第一話 その後とこれから

太陽も昇りきらぬ早朝に、軽やかな鈴の音が木霊する。静まり返った早朝の空気には、りんりんという鈴の音はよく響いた。音は煉瓦<sup>んが</sup>作りの一軒屋の二階から鳴っていた。たつぷり二分ほど鳴り続けた後、ようやく鈴の音は停止。鈴の音は目覚まし時計の音だった。時計の針が示す時刻は午前五時。時計のボタンを押したのはベッドから伸びた小さな手だ。

「んう……」

気合の声らしきぐもった呻きと共に、時計の主がベッドから起き上がった。耳にかかる程度で揃えられた赤い髪が揺れる。

時計の主は小柄な少年だった。枕元に置いた眼鏡を手に取り、一度目をこすってからかける。ベッドサイドのスリッパに足を通し、寝室のドアを開き、夢うつつのままにふらふらと廊下を歩く。

階段に差し掛かり、どすん、どすんと危なっかしい足取りで階段を降りていくと、ふいに足音が変わった。体重を乗せた歩みから、削るような音に。

一段踏み違えたのだ。

「おわ!？」

階段に尻を打ちつけ、派手な音を立てながら少年は階段を滑り落ちた。一階にたどり着くまでに十回は尻を打ちつけ、少年は涙目になりながら立ち上がる。

尻を撫でながら洗面台に移動し、ばしゃばしゃと乱暴に顔を洗うと大きく息を吐いた。

よし、と一言呟いた少年は、無地の寝巻きを洗面所の籠に脱ぎ捨

て、傍に置かれていた深緑の運動着に着替える。続いてスリッパから運動靴に履き替え、指を組んで腕を伸ばしながら外へ出ると、そこには赤毛の男が大きく欠伸をしていた。男も少年と同じように運動服に身を包んでおり、少年に気づくと歯を見せる笑顔で笑った。

「おう、ネギ。ケツは大丈夫か？」

「おはよう父さん……。多分大丈夫だよ」

少年の名前はネギ・スプリングフィールド。彼の一日は父親であるナギ・スプリングフィールドとのランニングから始まる。

二人は10分程かけて柔軟運動を行い、走り出した。コースは決まっている。森林の散歩道に入り、四キロほど行ったところにある広場で引き返す。最後に村の周りを一周して自宅に戻るコースだ。十キロ程度の道のりを一時間かけて走りきる。

ナギはゆつくりと傍らの息子を見守りながら楽に走るが、ネギは置いていかれずに走るだけで精一杯だ。

無事に自宅まで到着すると、見計らったようにドアが開いた。家の中からは、白黒の侍女服を纏った女が歩み出る。侍女は手にタオルとペットボトルを持ち、二人に差し出した。

「おはようございます。ナギ様、ネギ様。早朝のランニングお疲れ様です」

「おう、サンキュー。ティア」

「あ、ありがとう……」

ティアと呼ばれた侍女からタオルとペットボトルを受け取り、二人は休憩に入る。息を整えながらついでに飲むネギを他所に、

ナギはペットボトルの底を天上に向けて勢い良く飲んでる。しかも小指がピンと立てて腰に手を当てていた。

父の様子を見るネギは、大きく深呼吸。呼吸を整えてから父に倣ってペットボトルを天上に向け、勢いよく飲み始めた。ごくろ、ごくろと喉が鳴り快調に飲み進めるが、彼の体は水分補給より呼吸を欲した。

カッと目が見開かれる。

「ごばあ!？」

盛大にむせて、ネギは頭上に虹を作った。それを見たナギが笑いながら背中を叩く。ネギが落ち着くのを待って、ナギが声をかけた。

「あんま無理すんな、まだ水飲むか？」

「だ、大丈夫。もう水はいいよ……」

むせた際に鼻に入った水を抜きながらネギは答えた。鼻水と汗に塗れたタオルをティアが回収し、自宅に戻っていく。それをネギが目で追っていると、ナギから声をかけられる。ナギは右手に小さな木の杖を持ち、軽く振っていた。

「さて、じゃあ稽古いくか。防音魔法は掛けたから好きにかかってきな」

と言って、手に持った杖をネギへ放り投げた。彼らの稽古は、ナギが魔法を使わず、ネギはなんでもありで一撃を入れる事が目的として設定されていた。杖をキャッチして、ネギは言う。

「父さん……いつまでも僕を舐めすぎだね」

ふふふ、と挑むような笑み。

「僕は日々学習してるんだよ。魔法学校にある禁書をこっそり読んだり」

「おいおい、校則違反を親に告白すんなよ」

言葉とは裏腹にナギは笑顔だ。自分の経験と重ねているのだろう。最も、彼は在学中に図書室に近寄った事も無かったが。

「バレてないからOKだよ……！ あと母さんの書庫にもこっそり入って勉強した！」

「入るのはいいけど、俺に一言言えよそれ！ こないだ俺が母さんに怒られたぞ！ 危ないんだから付き添えって！」

「父さんと一緒に行ったら襲い掛かる為に覚えた魔法がバレるじゃないか。僕は自分の危険より父さんを殴る事を優先する！」

「息子が俺に対して本気すぎるんだが、教育間違えたか……」

額に指を当ててナギは悩み始めた。その時、彼の前にいたネギが消え去った。同時にナギが額を指で押しながら軽く前へステップ。彼が一瞬前まで立っていた位置を赤い突風が突き抜けた。ネギが後ろへ回りこみ蹴りを放ったのだ。突風はそのまま向きを変えて襲い掛かる。左足を軸に回転、右足をナギの胴体目掛けて放り込む。しかし、今度はナギの姿が消え去った。

「瞬動術は上手くなってるが、それだけじゃ俺には当たんねえぞ」

声はネギの真後ろ、五メートルほど離れた位置からだ。抗議の聲に代わって出たのは魔法の詠唱だ。

「ラス・テル マ・スキル マギステル！  
魔法の射手連弾・光の

キス

サギタ・マギカ セリエス ルー

9 矢！」

ネギの手元から光の矢が発生し、ナギへ向かって襲い掛かる。上下左右のそれぞれより二本づつ飛来する光の矢へ向かってナギは歩き出す。

左右から襲い掛かる矢を前進でかわし、上下から来る矢は頭を低くして軽くジャンプする事で潜り抜け、飛び越えた所に真正面から飛んできた矢を体の軸をずらしてくるりと回転。全弾回避。外れた光の矢が地面に直撃し、砕けた土が舞い上がって視界を遮った。

「お、煙幕をあげるのが本命か？」

土煙の中で、ナギは笑みを深める。息子が成長していると実感出来て嬉しいのだろう。

その笑顔に向かって真正面から拳が振るわれた。土煙を割って飛び込んできた拳をナギは軽く払い、その向こうに居たネギへボディブローを放った。直撃を食らって体をくの字に曲げたネギが風を巻いて消えた。

「お？」

瞬間、ナギの全周をネギ達が埋め尽くした。大量の分身による物量作戦だ。

「一発くらい当たれえ！」

サラウンドサウンドで放たれる気合の声と攻撃の嵐。それに対するナギの表情は笑みを崩していない。ネギ達の攻撃が触れる瞬間、ナギの右腕が動いた。

打撃音。

一つだけではなく、幾つもの音が重なって鳴り響いた。続けて大地に倒れ附す人影が一つ。勝者が敗者に歩みより、手を差し伸べた。

「成長したな、ネギ。流石俺の息子だ」

ナギの右頬には微かな赤み。

「いつかそんな余裕も言えない位、まともに殴るからね」

ネギは父の手を取り、ゆっくりと立ち上がった。

二人は稽古で流した汗をシャワーで洗い流し、着替えてリビングを覗けば既に朝食の準備が整っていた。テーブルの上にはトーストとサラダが並んでおり、ティアが飲み物を運んでいる最中だ。席につくと同時にティアが飲み物を傍らに置き、食事が始まる。

礼儀に五月蠅い者が居ない為か、二人とも口に物を入れて世間話をしながら食事を進める。

「ネギ、今日の卒業式だが俺は付き添っていけねえわ」

「え、どうして？」

「空港で母さんと未来を拾<sup>み</sup>ってから行くからな」

「え……。母さんはともかく、姉さんまで来るの？」

「そりゃ、弟の主席卒業式だしな！」

「あんまり騒がないでって言うておいてね……」

無駄だと思うけど、とネギは小声で呟いた。その呟きはナギの耳に入り、違いない、と同意の呟きが出た。二人の視線が合うと、互いに笑い声が漏れ出す。

その笑い声に割って入るように、ティアの無感情な声が聞こえた。

「ご歓談の所申し訳御座いません。ナギ様、そろそろお時間です」  
「うえ、もつかよ。しょうがねえなあ」

最後のトーストを啜え、ナギが立ち上がる。

「父さん、齒磨きなよ……」

「母さん達を拾って戻ってきてからな」  
「その母さんに嫌われるよ」

その声に応じるように、トーストが一瞬で飲み込まれ、ナギは洗面所に駆け込んだ。

「全く……、ティア、僕の着替えは用意出来てる？」

「T e s . 勿論でございます」

ティアは何処からか新緑色のローブと学校の制服を取り出し、ネギへ差し出した。そして、今まで変えなかった表情を柔らかい微笑に変え、

「着替えのお手伝いも致しましょうか？」

「い、いいよ！ ご馳走様！」

ネギは顔を赤くし、席を立つと着替えを奪うような勢いでティアの手から取り、部屋へ駆け上がった。一人残されたティアは微笑みのまま、ネギの消えた方向を見て呟いた。

「残念です、数年前までお任せいただけたのに」

ネギが着替えてリビングに下りると、丁度ナギが出発する所だった。ナギは左手で車の鍵をもてあそびながら、ネギに気づく。

「んじゃ、母さんと未来を拾ってくる。かつこつけておけよ?」

「頑張るけど、いくら格好つけても僕じゃ限界があるよ」

「何、俺の息子だからいくらでもかつこよくなるさ」

サムズアップしながら、ナギは自信満々に言う。ネギはその様子を見て、大きく溜息をついた。

「ああ、うん。そうだね。母さん風にいえばT e s・T e s・だよ

……」

「最近息子が冷たいぜ……。まあ、行ってくる」

「いつてらっしゃい」

ナギが玄関から外に出る。控えていたティアが一礼で見送っているのを見て、ネギは思い出したように呟いた。

「あれで英雄って呼ばれてたらしいからなあ……。周りの人が教えてくれなかったら、とても信じられないよ」

自分が父親に抱いている正直な感想を呟いた。

## 第二話 これからの担い手達へ送る言葉

ティアの見送りを背に受けて、ネギは魔法学校へ出発した。足取りは軽く、風を切って進む先は五年間通い続けた学校だ。色々な思い出があり、寂しくはあるものの、卒業式の後には控えている事を思えば期待が勝る。

歩く事約十分、ネギの目の前に巨大な神殿調の建物が現れた。石造りのそれは所々が欠けており、建てられてから相当の年月が立っている事を思わせる。メルディアナ魔法学校と名づけられた魔法使いの学校だ。

魔法学校の卒業生は、「立派な魔法使い」を目指す為の修行に出る。親元を離れて見知らぬ地で日々を過ごす事になるが、それが目標への一歩だと考えれば、辛いという思いをネギは抱けなかった。どんな場所に行く事になるのか、そんな事を思いながら歩いていると、後ろから声をかけられた。初老の教師だ。

「ネギ君、おはよう」

「おはようございます、先生」

「どうだね、体調は？」

「バッチリです！ 卒業式の後、何処で修行する事になるのか今から楽しみです」

笑顔で答えると、教師は「そうか」と笑顔で答えた後、予想外のリアクションを起こした。突然目頭に涙を浮かべ、呻きはじめたのだ。

「せ、先生どうしたんですか！？ 先生こそ体調が悪いのでは！？」

「いや、すまない。少々思う所があつてね」

「思う所、ですか？」

「うむ、と教師は頷いた。ネギから視線を外して空を眺めながら言う。」

「君のご両親を思い出してね……。共に中退されている。我々の教育に非があるのでは、とよく職員会議が紛糾したものだよ」

「冗談めかした口調だが、目は本気だ。目頭を押さえて深い息をつく教師に、ネギは常日頃思っていた疑問をぶつけてみる事にした。」

「先生、うちの両親は実際……。その、成績はよくなかったですか？ 周りの方から聞くと、中退した馬鹿二人としか教えてくれなくて……」

「ん、そうだね……。君の父、ナギ君は確かに学業は得意ではなかったよ。むしろ悪戯やサボりの常習犯で、まあ……。良くはなかった」

言葉を濁して可能な限り柔らかく伝えようとする教師の様子を見て、やはり、とネギは思った。たまに魔法学校の課題を聞くと額に汗をかいて話を逸らす父の姿を脳裏に思い出したのだ。

「だが、君の母、未央君は中々優秀だったよ。在学期間はとても短かったが、成績はなかなかだった」

「へえ……。あの母さんが、ですか」

思い出すのは、課題に困った父に呼ばれて苦笑する母の姿だ。

「彼女は今の君と同年くらい歳の頃に編入学してきたんだが、在学期間は半年程だったんだよ。しかし、とても優秀だった。よく本を読み、率先して学んで行った。編入学という事もあって基礎的な学力はあったから、あと二年も在籍していれば卒業資格を得られただ

ろうね」

「へえ……！」

これにはネギも驚いた。彼自身も優秀で、七年の教育課程を五年で終えた秀才と評価されているが、母の在学中の評価は知らなかった。

しかし、教師の顔が再び曇る。

「しかし、だ。未央君も問題が無いというわけではなかった。呪文詠唱の書き取りを命じると、書き込んだノートから魔法が発動して教室を破壊したり、廊下を走るナギ君や他の生徒をどついて廊下を壊したり……」

語る教師の目はどこか虚ろだ。

「壊れた物品や廊下の修繕費用は戻ってこない……！ 文字で呪文が発動するせいで書き取り課題や記述テストは全滅だ。しかし、正答は分かっているので評価に困ったものだよ。彼女一人口頭で回答させるわけにもいかないし、ぬうつう、思い出したら胃が痛くなってきた……！」

「なんかすいません……」

「いや、君のせいではない。全ては我々の指導力が十分でなかったからだ！」

教師の目に火がついたように見えた。

あ、不味い。これは長くなりそう！

「君のご両親は世界を救った英雄だ。しかしそれは結果論に過ぎない！ 二人ともが当校に在学しながらも中退して旅に出ている。それはいわば我々の教育が彼らを満足させる事が出来ずに旅立たせて

しまった事に他ならない。それは教育者として、一人の人間として、幼かった彼らの将来を狭める事になった可能性があるかと今でも深く悩んでいる！」

語りながらついに目幅の涙を流し始めた教師に、ネギは頷く事しか出来なかった。教師は切々と自分達が他の魔法学校から嫌味を言われていた事、魔法学校を統括する上部組織からの現実的かつ無慈悲な評価を下されている事、自分達のサラリーが地味に減っている事を語り続ける。最後は関係ない話に思えるが、ネギとしてはむしろ両親が恩師に対して辛い思いをさせた事に対して罪悪感を感じ、若干頬も引きつっていた。

「その悩みをさらに深めたのが、君のお姉さんだ。成績が伸びずに落第寸前で卒業。あの学校に入ったら大成しないんじゃないか、等と言う不名誉な噂まで流れて後が無かった私達に希望の光をくれたのは、そう……君だよ。ネギ君」

「は、はあ……。恐縮です」

予想通り長くなった、しかし姉の話を經由して自分の話に戻ってきた。しかし、姉の話をしている時は険しかった教師の表情は、穏やかなものに変わっている。

「君は本当に優秀な生徒だったよ。顔は父親似だが、学ぶ姿勢が強いのは母親似かもしれないね。君の修行先が何処になるかは私も知らないが、応援しているよ」

「はい、ありがとうございます」

ふう、と教師が一息ついた。ネギも予想以上に長くなった話に疲れを感じて、一息つく。

「では、折角だから君の姉の話も詳しく……」

あ、あれえー！？ 頼んでないよ！？

おかしい、確か今日は自分の門出を祝ってくれる日のはずだ。両親の話は自分が望んだ話ではあるが、何故姉の話になるのだろう。こういうのは卒業して成人した後に食事しながら聞くのが定番ではないだろうか。流石に辛くなってきたぞ、とネギが思った時だ。

「先生、ネギ。こちらにいらしたんですね」

教師の話題を遮るような声が響いた。穏やかな女性の声。振り返れば、金髪がたおやかに舞っていた。声の主は、少年の従姉妹である女性だ。

「ネカネ姉さん、おはよう」

話を変えるチャンスにネギは逃さない。すかさず挨拶をして体をネカネに向かせる。ネカネは微笑のまま、ネギと教師へ歩み寄る。

「そろそろ式が始まるのにネギが居なかったから、探してたのよ。まさか先生と一緒にだとは思わなかったけど」

「いやあ、興が乗ってしまっただけ。申し訳ない。ではネギ君、また式で」

「はい、先生」

話が中断した事で自分の熱に気づいたのか、教師は苦笑しながら二人に背を向けて去っていく。二人はそのまま見送り、教師が見えなくなったところでネカネは振り返り、

「まだ聞いていたかったかしら？」  
「勘弁してよ」

心底嫌そうにネギは呟いた。

卒業式の会場となっている講堂は静まり返っていた。

講堂には在校生や職員の他に卒業生の保護者が入場しており、卒業生の入場を待ちわびている。しかし、少々長い待機が続いてしまった為に、若い職員が落ち着かない様子で手元の進行表を確認していたり、在校生の男の子は暇をもてあまして隣の女子生徒にちょっかいを出し始めていた。

そんな中、講堂の入り口から新たに三つの人影が入ってきた。

「間に合ったぜ……！」

一人はナギだ。乱れた礼服の襟を正しながら講堂へ足早に入る。彼の後ろに行く二人は共に女、片方は黒髪に薄い緑のスーツを着た成人女性。もう片方は赤髪で学校の制服を着ている女学生だ。

黒髪の方が、同じく乱れた襟元を正しながら呟く。

「全く、今日に限って飛行機が遅れるなんて。危うくネギの卒業式に遅刻するところだったじゃない。折角の主席卒業なのに、親のせいで恥かかせたら台無しね……」

彼女はナギの妻であり、ネギの母親でもある女性だ。彼女の名前は未央・スプリングフィールド。この世界を大きく変えた犯人である。

その後ろを歩く赤髪の女学生は、腰まで伸びた髪に手を差し込み、

払う。赤い色が宙に踊った。

「主席どころかドンケツの卒業の姉で悪うございました!」

だが出た言葉は情けなかった。しかし表情は全く悪びれておらず、むしろ笑っている。

「愚弟が優秀すぎるのよ、優れた愚かな弟、これを優愚弟ゆうぐていと呼称する事に決めました!」

「却下よ」

「父ちゃんも流石にどうかと思うぞ」

「両親が子供を差別しているわ……!」

両親のつれない返答を受け、泣き真似を始めた女学生。彼女の名は未来・スプリングフィールド。メルディアナ魔法学校と姉妹関係にある魔法使い達にとってのみだが、麻帆良学園の在校生だ。

泣き真似をする娘を置いて、両親二人は保護者席に移動する。周りの保護者達から若干非難を含んだ視線と挨拶を受けて、謝りながら着席。しかし未来が来ない。振り向けば、未来は若い女の職員と話し合っていた。すぐに話し合いは終わったようで、未来が保護者席につく。

「貴女、先生と何を話してたの?」

「フフ、秘密よ母さん。ネギの晴れ姿に見とれているといいわ」

ふむ、と納得して未央は進行表に目を落とした。  
式はもうすぐだ。

講堂に柔らかな光が差し込む中、卒業式は始まった。前途ある若者達の姿が現れると、静かに講堂の一部が沸いた。それを感じた若者達は、少々顔を赤くしながら背を伸ばす。彼らに送られる言葉は、七年の教育課程を無事終えた事への祝いと、彼らの卒業を祝う為に駆けつけた皆からの祈りだ。その中で卒業証書の授与が行われ、ついに式は終盤に差し掛かる。来賓や校長からの挨拶が終わり、卒業生が退場する。その時、進行役の口から最後のプログラムが告げられた。進行役は、若い女の職員だ。

「では、生徒達の旅路を飾りましょう」

その声に対する反応は様々だった。

何か残っていたらどうかと進行表を見直す初老の教師、何かするべきなのか悩む保護者席のナギ、そして苦渋の表情で隣の娘を見る未央。彼女の嫌な予感は的中した。

未来が立ち上がっている。右手には彼女が使う魔法の発動体である短剣が握られていた。

止める間も無く、未来の右手が振られ、

「ラ」

ラの音から始まる旋律が始まった。短剣の刀身に波紋が広がり、講堂を一瞬で満たした。

直後、光と音が炸裂した。

ドン、という破裂音が連続して響き、色鮮やかな光が講堂に広がっていく。

魔法による花火の再現だ。

音は続き、光は流星のように床へ落ちていく。流星の落下コースは光の線を描き、卒業生と出入り口を結ぶアーチを形作った。

卒業生の一人、ネギが未来を見た。未来の口が小さく動く。

世界に意志を表す言葉を、貴方は、学んだ。

続く。

今や出立せよ。

そして一つウィンク。

受けたネギは苦笑する。やはり、という思いがあつたのだろう。  
姉から視線を外したネギが、光のアーチを歩き始めた。

### 第三話 担い手の決意表明

夜の星空があつた。

一面に広がる大小の星が煌いている。

ほかに灯りは無く、夜の闇が広がっていた。

そして夜空の下には一つの家屋があり、その屋根に腰かける影があつた。

ネギだ。

彼は屋根に座り込み、星空を見上げている。

「日本、か」

卒業式を終えて、判明した修行先だ。しかし、彼の表情には朝に見えていた期待の色は無い。

「きつつい課題だよなあ」

そう言つて身を投げ出すように屋根に寝転がった。

嘆息し、課題が間違いないか校長に問い合わせた時の事を思い出す。

……示された修行先に不備無し、不満があるならば修行は取り消し。

そんな事を言われては、ネギに断る事は出来なかった。しかし、

「先生をやれって言われてもなあ」

示された修行は、「日本で先生をする事」だった。

いまだ九歳のネギにとって、教職というものは全く想像出来なかった。他の卒業生に聞けば、占い師などいかにも魔法使いらしい修行先だったから不満にも思う。

ふてくされるように身を転がし、ネギはしかし、

「やるしかない、よな……」

後ろ向きながらも、修行への意欲を見せた。

目標は「立派な魔法使いになる」事なのだから、挫けるわけにはいかない。

と、ネギの呟きが夜に消えると同時に、星空の下へもう一人現れた。

白いシャツを羽織った黒髪の女性。両手に陶器のカップを持っており、カップからは氷と陶器が触れる音が響いていた。

「母さん」

「考え事？ お母さんが相談に乗りましょうか」

未央は片方のカップをネギに渡し、ネギの横に腰掛けた。

カップには冷えたミルクティーが注がれており、一口飲むと柔らかい甘みが口に広がる。

ほう、と一息つくと、未央は微笑してネギに問うた。

「修行、不安なんでしょう？」

「ん……。だって、先生をしる、だよ？ 不安に思わない方がどうかしてるよ」

口を尖らせて言うと、未央はそうねと頷き笑う。

こちらは随分不安な思いをしているのに、母は気楽そうだ。そう

思っていると、未央は続ける。

「でも貴方は父さんに似ず頭もいいじゃない。きっと出来るわよ」

「勉強が出来るだけで先生なんて務まらないよ。生徒の悩みを聞いたり、進路相談に乗ったり、僕でもそれくらい分かる」

「それが分かっているなら、出来る事をやればいいじゃない。何も貴方一人で全部やる必要は無いのよ。本来の担当の先生だって居るんだしね」

「それでも、授業の一端は請け負わなきゃいけない。僕が先生をやるには経験値足りなすぎると思う。ほんと、修行先考えた人は何を思っ僕に先生なんて振ったんだろ」

ネギの言葉に、未央はまた肯定して笑った。

笑ってばかりで、ちゃんと話を聞いているのだろうか。ネギはそんな疑問を抱いて未央を見ると、目が合った。

真っ直ぐにこちらを見ている。間違いなく話は聞いていたようだ。だが、改めて見ると未央の表情は緩んでいない。真剣にネギを見つめており、唇が動いた。

「辞めてもいいのよ？」

「」

言葉の意味が分からず、ネギは息を呑んだ。

辞めてもいい。そう聞こえた。

修行を辞めてもいいという意味だろう。話題の前後を聞く限り、その意味で間違いないはずだ。しかし、突然すぎる。真意を確かめるべく、ネギは問い返した。

「……どういう意味？」

「魔法使いを目指す事を、辞めてもいい。そういう意味よ」

受け取った通りの意味を、未央は告げた。

何故、という思いが胸に沸いて、言葉が続かない。

固まったネギに、未央は言葉が続ける。

「魔法使いを目指すのは、私も父さんも嬉しいわ。貴方が主席で卒業した事も、父さんと二人で喜んだもの」

でもね。

「やっぱり、危ない職業よ。前線に出なくても、一般人よりは遥かに危険な目に合い易いわ。そんな仕事だから、貴方が辞めたいと言うのであれば」

未央は右手を上げて、ネギの頬に当てた。

「私と父さんで、別の道を探してあげることも出来る。教育課程は終わってるから、当分遊んでいたっていいのよ。貴方の歳なら、それは許されるわ」

そう告げた母の表情は、最初から変わらない。

笑み、だ。

こちらを心配している慈愛を込めた笑み。

甘えても良いと、冗談で言っているわけではない事が伝わってくる。

そこで未央は言葉を切り、無言が周囲を支配した。

代わりに未央が伸ばした手が、頬から頭に移り、優しく撫で始め

る。

その手の感触が心地よく、ネギは目を細めて少し浸る。

しかし。

「ありがとう、母さん」

細めていた目が、はつきりと開かれた。  
そして、

「僕は、やるよ。修行先で課題を成し遂げて、立派な魔法使いになる」

告げて、母の手を取り、握る。

その言葉に、母は眉を下げて不安な笑みに変わった。

「立派な、といっても、仕事によっては人を傷つけたりする事もあるのよ」

「分かってるよ」

そう、分かっている。

「分かってる。それだけじゃない事も、分かってる」

それは、全て父や母の事を調べて知った事だ。

「人を傷つけるだけじゃない。人を助ける事も出来る仕事だよね」

家では惚<sup>とほ</sup>けている父も。そんな父を笑いながら叱る母も。

「傷つける事も、助ける事も出来る力がある」

そして、自分と同じく姉もそれを知っている。

「意思の持ち方次第で何だって出来る仕事だもの。僕はきっと成し遂げる」

そして、

「父さんと母さんと並んで、いつか追い越すからね」

言って、口元に不敵に笑みを浮かべた。

ついでに眼鏡をきざったらしく上げてみたりした。

冗談めかした動作だったせいかわ、母は動かない。こちらを覗き込む姿勢のまま、こちらをじっと見ている。

母の顔には、笑みがなかった。無表情にこちらを覗きこんでおり、

……僕の思いを量っている？

そんな推測をしながら、じっと見返す。

言葉にも、思いにも嘘は無かった。言うのは初めてだが、昔から思っていた事だ。

やがて母は嘆息し、再び微笑に戻る。握っていた手が、握り返される。

「そんな事言って、泣きついてきたら笑っちゃうわよ」

「そんな事にはならないから、平気さ」

互いに笑い、手を離す。

「じゃあ、僕そろそろ寝るよ。おやすみ」  
「おやすみなさい、齒、磨くのよ」

片手を軽く上げて応答として、その場を後にした。

一人残された未央は、手に持っていたレモンティーを一口飲む。  
そして何かを考えながら、冷えたカップを額に当てる。

「難しい顔してんな、未央」

そこへ、ネギと入れ替わるように現れた人影が声をかけた。  
ナギだ。

軽い足取りで屋根を歩き、未央の隣に座り込む。  
随分と楽しそうな様子だ。

「相変わらず出待ちしてたのか、ってタイミングで現れるわね、あなた」

「今回は出待ちしてたからな。未来と居間でゲームしてたんだが、二人の姿が見えないもんでな。探してたんだ」

なるほど、と思いながら、

「あなたも空気読むようになったのね」

「おいおい、いつまで俺を空気読めないガキだと思ってんだよ。夫を信じてくれよ」

「そうね、ごめんなさい。……それで、どう思う？」

何が、という問い返しは無かった。出待ちをしていたのだから、

話は聞いていただろう。

ナギはそうだなと言葉を置いて、

「いいじゃねえか。俺は息子が思ってたより考えてんなあって感動したぜ。流石未央の息子だな」

「誰かを助けたい、って理由が第一に来てるあたりは貴方によく似てると思うわよ」

「じゃ、俺達の息子って事で」

そう言って笑うナギは、未央の手からカップを取り、中身をすす  
る。

「あんまり不安そうじゃないわね」

「俺は嬉しいぜ。娘と息子が揃って魔法使いになって、俺達の後追  
つてくれてるんだからな」

「そういう言い方するなら、私だって嬉しいわよ。でも、やっぱり  
危ない職業だと思うのよね……」

「危険から遠ざけるばかりが親の仕事じゃねえって。ちょっと過保  
護だぜ、未央」

カップの中身をぐいっと一気飲みして、ナギは立ち上がる。

「魔法使いなら俺達が助言出来る。他の職業は知らねえ、なにせ学  
歴無いしな……！」

だから、あいつらがやりたいって言ってる間は支えてやって、挫  
けたら慰めてやりやいいじゃねえか」

「……そうね、というかこのやり取り、未来の時にもやったの思い  
出した。私成長してないわねえ」

「ま、未央が心配して俺がその分背中押し出してっから、バランス  
はいいだろ」

「そうね……っと」

続いて未央も立ち上がり、空を見上げて、

「なら、出来る限り助けてあげましょうか。過保護にならない程度にね」

「おう。日本で魔法使いを受け入れてる教育機関つつたら一つだからな。俺達の知り合いも居るし、一言声かけとくか」

「そうね、貴方はタカミチ君の方をお願い。私はエヴァや近衛さんに声かけるわ」

「喧嘩すんなよ、未来の時にエヴァに声かけて喧嘩したらしいじやねえか」

「あれは旧友とじゃれあつてただけよ。皆大げさに騒ぐんだから困っちゃうわ。さあ忙しくなるわよ！ 未来だけでも大変だったのに、麻帆良にネギまで行くんだもの。説得に時間がかかりそうだわ」

言つて、未央は持ち込んだカップを手に室内に戻っていく。

ナギもまた、左手で連絡すべき人間を数えながら続く。

残ったのは星が光る夜空だけ。

空に光るのは、大きな恒星だけではなかった。

小さくとも確かな光を放つ星が、確かな存在感を示していた。

それからしばらくして、ネギの修行先が正式に決定した。

日本で魔法使い見習いを受け入れている唯一の場所、麻帆良学園都市。

少年の姉も所属している機関だ。

そこには、少年の両親の友人が多数、本当に多数暮らしている。

それはつまり、少年の事を昔から知っているという事だ。

純粹に少年の到着を楽しみにしている者。

少年をいかに苛めるか思案する者。

少年を上手く利用してやろうと企む者。

少年を影から支えようと決意する者。

様々な思いを胸に持つ者達は、しかし共通した思いを二つ持っていた。

騒がしくなる。

しかし、

楽しくなりそうだ。

そんな思いで、少年の到着を待つ。

## 第四話　いつもの君達

白い雪で飾られた街並みがある。

雪はゆつくりと降り続け、厚い雲は陽光を遮っている。しかし、降り積もった雪が僅かな陽光を反射しており、街は薄暗さを感じさせない。

街を見渡すと、中央では巨大な樹が雪化粧を纏い、天に向かってそびえている。樹を囲むよう配置されている建物は学校の群れだ。人気の無い学校は静まり返っている。

1月の中頃、冬休みが終了して初めての土曜日だ。わざわざ教室に残っている生徒や職員は居ないだろう。

人気の感じられない学校を囲むように配置されているのは住宅街、そこに商店や娯楽施設などが点在しており、学校を中心とした都市を形作っていた。

こちらでは積もった雪を手に遊ぶ子供や、それを見守る大人の姿が見える。

そこから視線を外すと、森林に覆われた一角があった。雪化粧を纏った森林は、風に揺らされる事で細かな吹雪を作って居る。その森林の中には幾つかの家屋が点在していた。

木々から零れ落ちる雪をそれを見る視線が、ある家屋の二階、ベランダにやって来た。

赤く長い髪に片手を差し込み、風になびかせるように振り払うと赤の線がまばらに舞う。

「ふう……。雪が積もった後は空気も綺麗ね」

未来だ。

袖が少々余る服に身を包み、胸を張って深呼吸。鼻歌を歌いながらベランダの雪をつまんで空に散らす。

その背中に声がかかった。

「姉さん、遊んでないで荷解き手伝ってよ」

「愚弟、貴方の荷物でしょう。貴方がやりなさい。中身荒らしでもいいなら別だけど」

「弟の荷物荒らして何が楽しいんだよ……」

吐息まじりに言うのは、ベランダが備え付けられた一室でダンボールを開けるネギだ。

ガムテープを剥がし、中身を確認しながら仕分けていく。少年に宛がわれた部屋には彼の私物が運び込まれており、ダンボールが山と積まれていた。

どう見ても仕事用の服や資料だけには見えない。

「貴方そんなに何を持ってきたの？ 私が一人暮らししてた時から生活用品はあるって言ったでしょう？ ああ待ちなさい当てるから……。分かった、集めてる魔法具でしょ！」

「当たり前、っていうか姉さん僕の趣味知ってるでしょ。あとは魔法薬作る器具とか、そこらへんかな」

「愚弟、器具は私が持つてるとは考えなかったの」

「うん、全く」

だって、とネギはダンボールから視線を上げて、半目を姉に送る。

「姉さん、魔法薬の成績落第点だったよね？ あと簡単な魔法具の作成も落第点だったし」

「姉は薬や道具に頼ったりしないの」

未来は笑い、胸元から白い鞘に納まった短刀を取り出すと手の内にくると回す。

「……まあ、確かに姉さんはそういうの使うより自分のスキル使った方が早いね」

特に気を悪くする事も無く、ネギは再びダンボールに視線を落として荷物整理を再開した。床に敷かれた絨毯の上に、硬い音を立てて私物が置かれていく。

「……結構増えてるわね。しかも大半がアンティークじゃなくて新しい奴じゃない」

「実益を兼ねた趣味だよ。男は武器が大好きな生き物なんだ」

ダンボールから登場する魔法銃、術式付与が施された実体剣、白い槍、手甲など物騒な道具が床を埋めていく。続いて開けたダンボールからも同じような魔法具が取り出されていく。

「実家ではテИАとか母さんの目があるから、父さんところそり隠してたんだよね。趣味に理解が無いって辛いよ」

「子供が武器に熱を上げてるのを止めるのは、母親として一般的な反応だと思うわよ。父さんはまあ……細かい事気にしない人だものね」

ちなみに引越しは、民間会社に偽装した魔法使いの会社「ぶち猫急便」に依頼する事が一般的だ。でなければ税関で御用である。九歳の子供が国外から武器を持ち込んだと新聞の一面を飾らないで済むのは、彼らのおかげである。

ネギの周りが魔法具で埋まった時、それを眺めていた未来が、ぽんと手を叩く。

「愚弟、言い忘れたのだけど」

「何？」

「一般人の友達もたまに来るから、それ飾っちゃ駄目よ」

「ええ　！？　ここまで出しておいてそれ！？　最初に言っ  
てよ！」

がつくりと肩を落とし、ネギは取り出した魔法具を眺め続ける。  
少年を囲むように取り出された魔法具の数は三十を超えていた。  
そのまま十秒程眺め続けて、ネギはちらりと未来を見た。

「……駄目？」

「　駄目」

乞うように問い掛けるも、未来はそれをシャットアウトした。  
ネギは嘆息し、渋々ダンボールへと戻し始める。しかし、ダンボ  
ールの中へ衝撃防止用に仕込まれていた毛布を見て、ふと気づいた  
ように未来へ問いかける。

「展示棚にカーテンかけたら駄目かな！？」

「必死ね貴方！？　どれだけ武器に情熱燃やしてるのよ！」

「武器は……男の魂なんだよ……！」

熱意に押されたのか、未来は腕を組んで考え始める。

「魔法銃はまあ、変わったエアガンで押し通せなくは無いわね……。  
安全装置かけとけば魔法弾は出ないし。でも他の武器はどうかしら  
ねえ……」

「まあ、それで十分かな。でもたまに取り出して磨くからね」

「貴方そいうところはオタク気質よねえ」

それより、と一言置いて、未来はネギを指差す。悪戯でもたくら

んでいるかのように口の端を曲げており、ネギは思わず身構えた。

「愚弟、修行に来てるんだから趣味の事ばかり考えちゃ駄目よ？」

「！？　ね、姉さんにまともな指摘受けた……」

「これでも四年間ここで活動してる私に失礼よ愚弟！　もつと尊敬なさい！　プリーズリスpekt！」

「尊敬乞食とは新しいね、姉さんの事は局地的な尊敬してるからそれで我慢してよ」

そう言ってネギは魔法具を仕舞い始めた。ベランダの未来は「やだもう愚弟ったら尊敬してるだなんて姉ラブなんだからもっ」とトリップ状態でクネクネしているが無視だ。

どれを出したままにするかネギが悩んでいると、耳に入る音がある。

それは窓から部屋に入り込む昼を告げる鐘の音だ。別の区画にある時計塔から聞こえてくる音は、大きくもなく小さくもなく作業中の耳に気づく程度の音量で響いてくる。

「随分離れてのに、結構はつきり聞こえるね。魔法でも掛けてあるのかな」

「そうなんじゃない？　あの音って近くで聞いてもこんな感じらしいわよ」

トリップ状態から復帰した未来がいつの間にかネギの傍らに立っている。

「さて、それじゃあ昼食にお呼ばれしてるから、行きましようか」

「え、誰に？　まさかいきなり学園長とかじゃないよね」

「安心なさい、別の人よ。多分その人は……」

そこで未来は軽い笑みを浮かべた。招いた人物を思い出しての笑いだろうか、とネギが考えていると、未来が疑問に答えた。

「貴方が来る事を一番待っていた人よ。タカミチさんよりもね」

外出用のコートを羽織り、念のため魔法の発動体である指輪を右手の中指にはめてネギは未来の後について歩く。電車に乗って居住区から離れ、商業区を素通りして、降りたのは学校のある区画だ。土曜日の昼頃という事で、周囲に学生の姿は無い。屋外で活動する部活動も、降り積もった雪の前に室内へ引っ込んでいるのだろう。先を歩く未来は鼻歌を歌いながら、軽い足取りだ。

……気安い友人にでも会う感じだなあ。

そう思い、姉のクラスメイトで自分も知っている人間を脳裏に描く。

すぐに出てきた人物は三人。

……アスナさん、木乃香さん<sup>このか</sup>、刹那さん<sup>せつな</sup>のうち、誰かな？

この三人は魔法使いの事も知っており、姉も随分お世話になっている。

アスナと最後に会ったのは二年ほど前だが、躊躇なく厳しい突っ込みを姉に飛ばしていた事が印象的だ。自分にも優しくしてくれたので、よく覚えている。

木乃香と刹那は今年の冬休み中に年始の挨拶に京都へ行ったので、アスナより鮮明に覚えている。仲睦まじい様子なので姉が百合カップル扱いすると刹那が焦り、姉と木乃香にいじられていた事が印象

深い。

……しかし、否定しない木乃香さんは本気なんだろうか、あれ。

答えが怖いので聞いていない。

しかし、それほど親しかっただろうか、とネギは疑問に思いながら他の候補を考える。

タカミチ以上に、とわざわざ言う事からタカミチではないだろう。大人で彼以上に自分を待っていた人物といわれると、想像がつかない。

「姉さん、いい加減どこに向かってるか教えてよ」

「何処に言うなら教えてあげるわ。図書館島よ」

「図書館島あ？」

どう考えても食事をするところではない。むしろ一般的には飲食厳禁ではないか。近いうちに行ってみたいところではあったが、昼食を取る為に行く事になるとは思わなかった。

そう考えているうちに、図書館島が見えてきた。

湖に囲まれた島へ石橋がかかり、そこには巨大な洋館が佇んでいる。少々古びた印象を受けるそれは、世界でも有数の蔵書量を誇っているとの噂だ。一般図書から魔法図書まで幅広く取り揃えている為、魔法使いで読書家の人間にとっては天国と言えるだろう。

しかし、姉は正面入り口を通り過ぎ、島を一周する散歩道へ入っていく。

「姉さん、入り口間違えてるよ」

「愚弟、いくら私でも四年間住んでる場所で迷ったりしないわ。そっちは正面入り口、目指してるのは裏口よ」

「裏口？」

「そ。招いてくれた人は図書館島の底に住んでるのよ」

「底！？ スケールが違う引きこもりだなあ、トカゲ人間とかじゃないよね？」

「トカゲ人間って何世紀のセンス？ 安心なさい、人間……いや、人間かしらアレ。大丈夫、外見は人間よ。奇特なものも否定しないけど」

「何それ！？ 不安になってきたなあ」

うーむ、と唸りながら、ネギは未来の後をついて行く。

図書館島の正面から裏手に回り込むと、古い煉瓦で出来た塀に鋼鉄の門が備え付けられていた。門は四メートルほどの高さがあり、気軽な来訪者を拒むような空気を出していた。しかし、未来は迷うことなく門に手を当て、軽く押す。

蝶番の軋みをあげながら扉がゆっくりと開き、その奥は昼にも関わらず暗い空間が広がっている。

「姉さん、本当に大丈夫なんだよね？」

「少しは姉を信じなさい」

「魔法学校時代に僕へ仕掛けた数々の悪戯が無ければ信じたんだけどね。図書室絡みだと本棚の上から巨乳姉系の写真集が振ってきた事だよね、アーニヤに疑われるわ周囲からシスコンだと思われるわで最悪な畏だったよ」

「古い話を持ち出す男は嫌われるわよ。今回は何も仕掛けてないから、ほら、早くついて来る」

扉を抜けて暗い廊下を通り過ぎると、開けた空間が広がっていた。一面に本棚が並んでおり、見上げると本棚が壁のように天井まで続いている。

圧迫感すら感じる量だ。しかしこれ程の量にも関わらずカビの匂いがしない事にネギは驚く。

……魔法で管理しているんだろうけど、本棚一つ一つに術式付与してあるのかな。どっちにしるすごい手間がかかりそうだ。

手近な本棚に視線をめぐらせると、一般の図書館では読む事が出来ないのであるう貴重な書籍が並んでいた。

思わず手を伸ばして一冊抜き取るうとした瞬間、

「ひい　　!？」

バネの弾くような音と共に、本棚から矢が飛び出してきた。

反射的に背を逸らし矢を回避したネギ、しかしそれでも避けきれない。

当たる。

「おわっ！」

回避に専心するネギを、真横から引き寄せる力があつた。未来だ。

ネギの肩口を掴み、自分の胸元に抱え込む。

それによつてネギの頭部を狙った一矢は外れ、床に突き刺さる。

「愚弟、危ないわよ？」

「トラップがあるならあるって言つてよ!？」

「魔法使いが管理してる図書館なんだから、それくらい……いや、普通無いわよね。確かに一言言っておくべきだったかしら。ワンミスね」

ところで、と未来はネギを笑みで見下ろす。

ネギの視界が未来の赤い髪と口元の笑みで埋まる。姉とは言え、この距離はちよつと近い。

「な、何……？」

「愚弟、いつまで姉の胸部にくつついてるつもり？ 乳離れしない子ね！ エッチ！」

「ち、違うよ！？ これは単純に離れるタイミングを見失っていたただだよ！」

それに、と勢いづいてネギは言う。物の弾みで、つい、言っではいけない事を。

「大体姉さんの胸ってパッドで増量してるじゃん。そういう事は天然巨乳になってから言ってよね」

瞬間、ネギを掴む腕が敵意を帯びた。肩を抱えていた右腕が一瞬で首に回り、左腕が頭蓋骨をホールド。それぞれが獲物を捕獲した蛇のように締め付けてくる。

が、と声が漏れ、回された腕が首に入った。

「ね、姉さん……！？ これば、やばいっで！？」

「アンタは言っではいけない事を言っただわ、愚弟……」

両腕は更なる力を発揮し始め、ネギの体を宙に浮かしはじめた。

「い・い・こ・と……？ 人が気にしてる事を言っちゃいけません、って……！ 母さんやティアに言われなかった……！？」

「……！ ……！！！」

「第一、母さんも私と同じ頃は貧しかったの……！ でも今はそこ

そこあるでしょう！ 将来性はあるのよ！ ただ私は母さんと違って周囲に富める者が多いの！ だからプライド的にパッド仕込んでも仕方ないのよ！ わかる！？」

「……！！！！」

「返事がなあ い！！」

出来るわけがない。心の中で精一杯の抗議をしながら足をばたつかせ、

……姉さん相手にこのネタ使うのはやめよう。

そう思いながら、ネギの意識は暗闇に落ちた。

意識が覚醒を始める。

暗闇に包まれた視界が開けると、白い霧に包まれた世界が見える。声が聞こえる。

「……りすぎですよ、未来」

「……しだって反省してるわ」

男と女の声だ。

男が女を諷めており、女の声は低いトーン。反省しているのだろう。

少しずつ視界を満たす霧が晴れていくと、自分が寝かされている事に気づく。

指、動く。足、動く。深く息を吸うと、引っかかるような咳が出た。

「どうやら起きたようですね」  
「ネギ」

女の声が近づいてくる。赤い色を纏ったものが近づいてくる、その程度にしか認識できない。

「ごめんなさい、やりすぎたわ……。大丈夫？」

たぶん、へいき。

そう言ったつもりだが、声の代わりに咳が出るばかりだ。背中に手が回されて、優しく撫でられる。ゆっくりと息を吸い、躓かないように、吐く。

それを五回。

最後に大きく息を吸い込み、胸に詰まった不快感を息と一緒に吐き出した。

視界の霧は晴れ、思考もクリア。少々喉は痛むが問題ないだろう。傍で背中をさすっていた姉、未来を見ると、眉を下げてこちらを案じる表情をしていた。

なんだかんだで優しい姉だ、あまり罪悪感をもたれても困る。そう思い、

「姉さん、何似合わない表情してるのさ」

「あら……。たまに優しくしてればいい気になるわね、この子」

背中にまわされていた手が頬に移り、軽くつねられる。

……。まあ、こんなもんだよね。

家族でも触れてはいけないキーワードがある、と改めて心に刻ん

でいると、

「おやおや、首絞めで落とした後だというのに、また姉弟喧嘩ですか。飽きませんね」

男の声が聞こえた。

声の方を見れば、黒く長い髪を後ろに束ねた優男が水差しを持っていた。

その男には見覚えがある。

「あ……」

「お久しぶりですね、ネギ君」

声をかけられて、思わず啞然とした。

そこに居たのは、両親の盟友であり仕事仲間でもあると聞いていた男だ。

「アルさん!？」

「ええ、>紅き翼<のアルビレオ・イマ。今はクウネル・サンダーズと名乗ったりもしていますが」

アルはにこりと笑う。穏やかな笑みだが、何故か信頼し切れない。そんな笑み。

「ようこそ、麻帆良学園へ。未来と君が揃うのを今か今かと待ちわびていましたよ。それこそ欲しい本の発売日を待つ読書家のようにね」

とりあえず、

「昼食でも取りましようか。それが終わったら、少し話でもしまし  
よう」

## 第五話 本が語る印象

図書館島の地下数百メートルというロケーションで昼食会が行われていた。太陽の光も届かない地底だが、壁が眩しくない程度に光っており、薄暗いどころか昼のような光量を空間にもたらしている。足元には石床の代わりに清潔な砂浜が広がっており、何処からか川のように水が流れていた。

砂浜の一角に用意された東屋に、<sup>あずまや</sup>三つの人影がある。テーブルに用意されたのは、和風の建築物に似合わないパスタやサラダといった洋食だ。奥に一人座る男性は、テーブルの料理に手をつけず、正面に座る二人を笑顔で見ている。笑顔で観察されている二人は、ともに赤い髪の少年と少女。少女は手元に寄せたサラダにフォークを突き刺し、ニンジンをかかげながら少年に問う。

「ククク、愚弟？ 貴方まだニンジン苦手なの？ カロチン豊富な  
のよ」

「苦いのは嫌いなんだよ……。栄養学的に言えば別で取れるし、ニンジンじゃなければ駄目ってわけでも無いじゃん」

「屁理屈言っけど、そういつてピーマンやブロッコリーも食べないわよね貴方。子供舌め！」

「お、大人になったら食べれるようになるって母さんも言ってたし  
！」

「まさかそれを信じるとは……。貴方、頭いいのに実は馬鹿ね」

二人の間にオレンジや緑の物体が飛び交い、口に運ばれるべき食材は空中で弾幕合戦を繰り広げ始めた。

それを眺めるアルビレオが、やれやれと頭を振りながら、

「ネギ君、<sup>みき</sup>未来。行儀が悪いですよ。作ってくれた人に感謝を込め

て食べようとは思わないのですか？」

「そ、そういわれると……。すいませんでした」

「アルが正論を……！？」

アルの言葉を受けて、ネギは苦い顔をしながらフォークで少しずつ食べ始め、未来は一人衝撃を受けて呆然とする。噛み始めた頃は苦い顔をしていたネギだが、少しづつ表情から陰が落ちはじめ、野菜をつまむ手も素早くなる。

「あ……美味しい。ドレッシングが甘口でいいですね。まさかアルさんが作ったんですか」

「そのまさかです、と言えないのが少々残念ですね。家事をこなしてくれる者が居るんですよ」

「ふふふ、愚弟。この方をどなたと心得てるの。紅き翼時代に一切炊事洗濯をしなかったと言われるアルビレオ・イマ様よ。当番に当たっても無視！ 泣く泣く詠春さんがフォローに回ったという伝説をご存知ない！？」

「ご存知あるわけないじゃん！？ 父さんも母さんも昔の話してくれないしさあ！」

「いやあ、不得手なもので。お恥ずかしいですね」

言葉とは裏腹にアルビレオの口元は反省や羞恥の色は無く、笑いながら受け流している。

そして、お返しとばかりに未来へ向かって言葉を放つ。

「しかし未来、貴方も人の事は言えないでしょう？ 一度作ってきただお弁当はそれは酷いものでした」

言葉の後半からアルは虚空を眺め、口元に手を当てる。少々肩を震わせながら、目線を外して語る。

「おかずは酷く乱れて、ご飯と混ざり合っていましたからね……。な  
んでしょうか、理解不能な味としか描写出来ませんでしたよ」

「姉さんは……、色々適当ですからね……。仕切りとか、食べ合わ  
せとか考えませんし……」

続くようにネギも虚空を見る。二人は虚ろな目で視線を合わせた  
後、がっしりと握手をかわし、責めるような半目を未来へ繰り出し  
た。抗議の視線を受けた未来はクククと不敵に笑い、

「こんなにも可愛い女の子が！ 料理を作ってくれたという事実だ  
けで喜ばない！」

「自分で可愛い女の子って言ったよこの姉」  
「事実だから何も問題はないわ」

「いや、姉さん可愛い系ってより綺麗系だし」  
「あら！ やあねこの子姉を口説く気！？ 私そういう趣味はないん  
だけど」

未来が頬に手を当ててニヤニヤ笑うが、ネギはさらりとスルー。  
そんな兄弟のやり取りの横から、笑い声が響いた。

アルだ。

笑い声に気づいた二人がアルを見ると、彼は口元を手で押さえ、

「おっと、失礼。続けてくださって構いませんよ。存分にどうぞ」

……意外と懐の広い人なのかな。

騒がしくしてしまった、と自覚しながらネギは思う。母から聞いた話や、何度か会った過去の記憶では静かに読書をしている事を好

む人物だった覚えがある。

自分と姉のやり取りはいつもの事だが、騒がしいので一言咎められるだろうと思っていた。しかし、アルビレオは咎めることなく、正反対のリアクションを行った。

……存分に、と言われてもなあ。

基本的に姉との喧嘩は勢いだ。一度中断すればそのまま自然と終わる話題なので、改めてやり直すという事はない。姉をちらりと見ると、カモン系の手招きで挑発的な笑いをしているが無視だ。構っているとは延々と続くのでキリがない。

気を取り直して、アルビレオを見る。

本を手元のテーブルに置き、こちらを見ていた。

目が合う。

どうしようか悩んでいると、あちらが首をかしげ、

「どうかしましたか？ まだ嫌いな食材があるんですか？」

「あ、いえ。別にそんな事は無いです」

そうですか、とアルビレオは姉に視線を移した。視線の先では姉がパスタを拳大になるまで巻きつけてフハハと笑っている。ちゃんと食べれるのそれ。

そんな姉を見ても、アルビレオの表情は変わらない。

常に穏やかな笑みを浮かべている。

それは、父や母が自分達を見る表情と似ていた。

自分と姉が揃うのを楽しみにしていた、と彼は言った。

……何か約束していたかなあ？

そんなに期待される理由が全く思い浮かばない。サラダに混じっていたゴボウを歯ですりつぶしながら考えていると、再び目があつた。

丁度いい、そう思っただけ疑問を投げかける。

「アルさん、僕達、何か約束していましたっけ？」

「いえ、特にしていませんよ。どうかしましたか？」

「僕と姉さんが揃うのを楽しみにしていた、って言うので、何か約束していたかなあと。忘れていたら失礼ですけど……」

その問いに、アルビレオはそんな事ですかと笑い、

「確かに貴方達とは約束していませんが、ナギと未央と約束していたのですよ」

「父さんたちと？」

そう聞いて、ネギは未来に視線で問い掛けるが、未来は首を横に振った。

二人で問いかける視線を投げかけると、アルが続ける。

「ナギと未央には、随分昔に約束を交わしましてね。子供なのに前線に出るのであれば、必ず生き残って二人の子供を見せてほしい、と。ですから、二人が元気に騒いでいる様子を見るのは、私にとって待ち望んだ光景なんですよ」

言って、アルは手元の本を取り、ぱらぱらと開きながら、

「まあ、年寄りの思い出話です。あまり気にせず食事が続けてください。私も食事を取ります」

言って、アルは食器ではなく手元の本から一頁をつまむ。  
そして、一気に頁を引き裂いた。

「……え？」

予想外の行為に、ネギの思考が停止する。裂かれた頁を持った手は、そのまま上にあがっていき、口元に到達。

「はむ」

食べた。

パリツと乾いた音を立てて頁はアルビレオの口内に運ばれ、噛み砕かれている。

……訳が分からない。ヤギ？ アルヤギさんたら読まずに食べたっていう奴？

どうリアクションしていいか迷い、ネギは未来へ視線を送った。未来も動揺して大粒の汗が額から流れていたが、首を縦に振り、自分に任せろ、と視線で答えてきた。姉を信じて、ここは待ちの一手だ。

「ちょっとアル……、その、なんていうか……。そう、アレよ！」

頑張れ姉さん！ 不条理に負けるな！

「そう……、それって何味！？」

敗北の衝撃で机に額を打ち付けた。

本は食べる物じゃないはずだ、正気なのは僕だけなのか。図書館島はアルさんの食料庫か。

「深い描写がなんともいえぬまろみを出すんですよ」

「嘘だア　！　ていうかなんで本食べてるんですか！？　そういう生き物でしたっけアルさん！？」

「フッフ、いいリアクションですね。ネギ君。わざわざ用意した甲斐がありましたよ」

アルビレオはそう言って、再び頁を裂き、指に挟んだ頁を自分と姉に差し出してきた。受け取ってみると、その頁は普通のものである事が分かる。

……うわ、パンだ、これ。

薄く焼いたものを更に薄くカットイングして、周囲を白糖でコーティングしてある。文字に見えたものはチョコレートか何かで書かれていた。

凄まじい手間と時間をかけた一発ネタだなこれ！ と、驚きが一周して感心してしまい、興味本位でネギは少しかじってみる。口に入った欠片は、周りを固めていた砂糖が一瞬で解れて口に広がり、

「あつまー！」

「食べるなら文字部分のビターチョコと一緒に噛まないと糖度で死にますよ」

「先に言ってくださいよ！」

「ははは、先に言ったらリアクションが見られないではないですか」

駄目人間だこの人、今後は一緒に食事するのは控えよう。

「あま！ 甘いわこれ！ この甘さ、まさに脳天直撃！ スウイイ ツー！」

一方、未来は気に入っていた。バリバリと音を立てながら勢いよくかぶりついている。これ幸いと手元に残っていた砂糖菓子を未来の前に置き、口直しをするべくサラダに取り掛かる。

しかし、残念ながら瑞々しい生野菜をいくら食べても、口の中に残った砂糖の後味を駆逐し切る事は出来なかった。

甘ったるい口内と格闘して食事を終えると、アルビレオが、さて、と声をあげた。

「和やかな昼食も楽しめましたので、今日呼びした用件に入りましょうか」

「馬鹿みたいに甘い砂糖菓子を除けば和やかでしたね」

「多分その嫌味通じないわよ」

「今日は少し言っておくべき事があるので呼びました」

「うわ、本当に通じないっていうか無視した！」

ネギの言葉に、アルは口元に笑みを浮かべながらスルーして続ける。

「未来は勿論知っていますが、麻帆良学園には色々と事情を抱えた人物が多く在籍しています。大半はお二人も知っている人物ですけどね。……ネギ君、想像はつきますか？」

言って、問い掛けるような視線をネギに送る。ネギは頷き、続きを促す。

「まず、一番の重要人物とはある国の元姫君です。色々あって今は麻帆良にある喫茶店の看板娘をしながら学生しています。喫茶店のデリバリーも請け負っていますので、機会があれば頼んでみるのもいいでしょう」

「……元お姫様のデリバリーですか」

「ええ、本格的な珈琲や紅茶をその場で入れてくれますよ。そして、これが重要なのですが……」

アルは鋭い目つきでネギを見る。右手の人差し指をピンとつきたてて、

「メイド服なのです」

「……は？」

メイド服？

「聞こえませんでしたか、メイド服でデリバリーしてくれるんですよ。実に可愛らしいので一見の価値あります。休日の十五時くらいはよく走り回っていますよ」

「えっと、あの……あすな明日菜さんの事ですよ？ 元お姫様って」

「はい、今は神楽坂かぐらざかあすな明日菜と名乗っていますね。間違いなく彼女ですよ」

アルの目は本気だ。

……僕の脳みそがおかしくなっただろうか。

肩に手を当てられて、ネギは未来の方を向く。未来も真面目な表情で、

「愚弟、胃に穴を開けなくてはなればアルの趣味に口を出すのはやめておきなさい。突っ込みきれずに死ぬわよ」

「う、うわぁ……！ 先行き不安になる事言わないでよ！」

「ちなみにパンチラのようなサービショツトは興味が無いタイプですので、そこは勘違いしないでくださいね。可愛く取れたアルバム見ます？」

「結構です！ それ本人の許可取ってるんですよ！？」

「はっはっは。……はっはっは」

「絶対無許可だよこの人！ 姉さん人呼んでー！」

「呼んでもいいけど、間違いなく捕まらずに逃げるわよ。面倒だから放置なさい、放置」

くっ、とネギは苦い顔で水を飲む。

変人だとは聞いていたけど、ここまでとはなあ。

呆れながら、気になった事を問い掛ける事にした。

「あの、喫茶店の看板娘って事ですけど、元お姫様にそんな事させていいんですか？ あと大丈夫なんですかアルバムとか」

「彼女はお姫様扱いを嫌ってますからね。その喫茶店は彼女の保護者が経営しているので、手伝いも自発的に始めたものですよ。アルバムはジョークです、脳に保存してあります」

「魔法世界の重要人物が、喫茶店でメイド服着て接客して、大戦の英雄がその姿を脳内録画ですか……」

「どうしたの愚弟。個性負けを気にしてるの？ 大丈夫よ貴方だって大戦の英雄の息子で九歳で教師はじめる超個性派じゃない。グレイト！」

「大戦の英雄の娘で魔法学校を落第寸前で卒業した人には負けるよ」

アルは手元の紅茶を飲みながら一息つく。

「少々話がズレましたが、次に移りましょう」

「アルさんが率先してズラした気がしますけど」

「愚弟、そういう突っ込みは無駄だと学びなさい」

未来の言葉通り、アルは投げかけられた言葉を気にせずに続ける。

「次は、関西魔術協会のご令嬢ですね。近衛<sup>このえ</sup> 木乃香<sup>このか</sup>さんです。まあ、彼女は明日菜さん程変わった生活はしていないので、ご安心ください」

「信頼していいのかなあ……」

「勿論です、彼女は普通に中学生として青春を謳歌していますよ。未来に聞いてみてください」

話題を振られた未来は、残っていた頁型の菓子パンを齧りながら答える。

「そうね……。バイトはしていないけど部活を幾つか掛け持ちして、刹那をお供に連れて放課後を楽しんでるわよ」

「あ、本当に普通そうだね」

「ええ、占い研究部と、この図書館島を探検する図書館探検部」

言いながら未来は指を一つづつ上げていく。一つ、二つとあげて、三つ目。

「あと、チュパブラ研究会」

「ごめん、早速だけど前言撤回する。木乃香さんも普通じゃないんだね……」

即座に未来から視線をずらし、ネギは現実逃避の体勢に入る。しかし、未来がくると回りこみ、

「どうしたの愚弟。人の部活にケチをつける気？」

「いや、なんだよそのチュパブラ研究会って……。普通に考えて中学生が入るものじゃないよね？」

「チュパ研の何がおかしいのか答えてみなさい！ チュパブラとは南米でよく目撃される未確認動物（UMA）で様々な仮説を打ち立てられている超浪漫生命体なのよ！ 青春使ってバリバリ調べるべきでしょ！」

「その浪費してる青春は十年後に必死で欲しがる青春だよ。そんなの研究したいならもう南米に行けばいいじゃん！ 百歩譲っても日本ならツチノコあたり調べてるべきじゃない！？ 誰だよそんな馬鹿な研究会の立ち上げた人は！」

「私」

「えっ？」

「私よ」

誇らしげに胸を張る未来。ネギは自分のカップに新しい紅茶を注ぎ、席を立って歩き始める。東屋の縁、視界に移る木々と本棚の風景に現実逃避しながら、紅茶を一気飲みする。

砂糖も何も入れていないストレートの紅茶が、苦味をもって心身に渴をいれる。喉の奥が痺れ、うおお、と呻き声を漏らした後に大きく息をつき、席に戻る。

「……学校公認の部活じゃないよね」

「残念ながら、同好会ね……。会員はそこそ居るんだけど」

「今ほど麻帆良学園の良識に感謝した事はないよ。アルさん、次お願いします」

「いやあ、見てて退屈しませんねえ。愉快的姉弟だと再確認出来ましたよ。フッフ」

「あまり長々と語ると後の楽しみ……もとい、日が落ちてしましますので次で最後にしましょうか」

「後の楽しみって何ですか……!？」

「ククク、決まってるじゃない。貴方の驚きリアクションよ！」

「予想できてたけど聞きたくなかった……！」

頭を抱えるネギを笑顔で眺めつつ、アルが話し始める。

「最後が一番ネギ君にクリティカルな人物でしょう。麻帆良学園の裏ボス、フィールドエンカウント系ラスボスといった渾名で学園では呼ばれている教師。エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルです」

「フツ……、大体予想ついてましたので、驚きませんよ。でもクリティカルって意味がすごく気になるので続きをお願いします」

「クリティカルの意味はですね……。彼女が受け持っているクラスで貴方が修行する、という事が既に決まっているという意味です。つまり、貴方の上司になるわけですね」

「ああ、なんだ。そんな事ですか」

ネギは眼鏡の位置を直しながら、口元に笑みを浮かべて答える。

「むしろ理解のある上司で嬉しい位ですよ。たまに魔法理論で相談すると、『暇な時に気が向いたら答えてやるよ』って言いながらしつかり答えてくれますからね」

「おやおや、エヴァはストライクゾーンが広いですねえ」

「そういう関係じゃないですよ!? 今の話で何処からそうなるんですか!？」

「え、そういうつもりじゃなかったの……? 私も今の話は『僕気に入られてるんですよ』っていうアピールかと思っただわ」

「いや、間違つてるとこは結構キツい感じで詰られるし……」

「エヴァは興味の無い人間はスルーしますので、それは気に入られてますよ」

「そういうものですか、まあ気に入ってもらえるなら期待に沿えるように頑張りますけど」

言ったと同時に、ネギの肩に未来の手が置かれた。振り返れば、未来は獲物を見つけたと笑みを全面で浮かべており、

「貴方、実は怒られるの結構好きだものね！　よかったわね、母さん以外にも叱ってもらえる女の人増えて！　ご褒美ですって奴！？　私もそうしましょうか！」

「勝手に僕をマゾ的な人間にしないでくれる！？　別に怒られて喜ぶ趣味はないよ！」

「でも貴方、昔宿題の間違いを母さんにちょっと叱られた後にやたらニヤニヤしてたじゃない。父さんと二人で話し合ったところあれはマゾだから放っておこうと……」

「父さんが本気で殴ってくるようになったのはそのせい！？」

「息子を容赦なく殴るナギには、そんな背景があったんですね……」

違っから、とネギは手を振りながら答える。未来の話に反論すべく、額に指を当てて思い出しながら語る。

「あれは、そう、僕には結構難しい話で、父さんに聞いても逃げられたから母さんに聞いたんだよ。そしたら母さんがあっさり答えて、考え方まで教えてくれたから思わず嬉しくて笑顔になったんだよ。怒られて嬉しいわけじゃないよ」

「ふうん……。ま、そういう事にしておきましょう」

ここで突っ込んだらまた長くなる予感がする。

確信に近い思いを胸に抱き、ネギは黙って首肯する。我慢だ、我慢。

「さて、ここで話をエヴァに戻しながら……エヴァを含む、私のような君に縁のある人間がどういう立ち位置であるか話しておきましようか」

その台詞を聞くと、ネギは拳に僅かな力が入った事を自覚した。長々と雑談のような近況を話していたが、今日の本題は間違いなくこれだろう。両親は共に魔法使いを統括する組織に身を置き、それなりに高い地位についている。その子供として？特別扱い？される可能性は当然考えていた。あまりそういった扱いを受けるのは好きではないが、

……僕に出来るのは、言葉で望む事より行動で示す事だ。

特別扱いしないでほしいと望むよりも、ある程度許容しながらそんな扱いが不要だと周りに示した方が早い。ネギはそこまで考えてアルの言葉を待つ。

アルはネギを見ながら表情を微笑から、より一層怪しい糸目の笑顔に変えて、

「ぶっちゃけ、私達は手伝いませんので。放置プレイを堪能してください」

言い放った。それはある意味こちらが望んでいた事だが、

「放置……ですか!？」

「エヴァは一応麻帆良学園の教師ですから、そちらのサポートはしてくれれますよ。本人の言質も取っております。ですが、魔法使いとして……と言われると知らぬ振りをしますので」

「ちょ、ちよつと待ってください。僕、魔法使いの修行として先生やるんですね？先生の手伝いはするけど、魔法使いの修行は知らないっていうのは意味が通じないんじゃないですか？」

「いやあ、ナギからも出来るだけほつといってくれと頼まれていますか

らねえ。友人からの頼みでは聞かざるをえませんよ」

「と、父さんが!？」

「ちなみに未央は過保護にならない程度に手伝ってほしいとの事でしたので、エヴァが折れて先生の方をサポートする事にしたそうです」

「……え、母さんが頼まないとうなっただんですか？」

「そちらに居る実体験者に聞いてみてはどうですか？」

と、アルは未来を手で刺す。両目を閉じて紅茶をすすっていた未来は、片目だけ開けて答える。

「私は？学生として生活しろ？っていう修行だったから、別に困らなかったわよ？ まあ、実際のところは？学生として生活しながら魔法を使つて困っている人を助ける？だと思っけど、学園生活でバレないように魔法を使うのには工夫が必要だったわね。そこをーから考えるのに苦労した位よ」

紅茶のカップを揺らしながら続ける。

「貴方の場合、修行のメインは？魔法を使いながら、誰かに何かを教える事を経験しろ？って事じゃないかしら？ ほら、貴方なまじ優秀だから父さんや母さんの跡継ぎに期待されて大変よねえ」

他人事のように紅茶をすすり、そして何かに気づいたように再び話し出す。

「貴方っていうか愚弟ね！ 愚弟！」

「それ言い直したかっただけ！？ 姉さんたまにナチュラルに僕の事愚弟って言い忘れるよね？ キヤラ付けなの？」

「ほら、真面目な話の時はつい貴方って言っちゃうのよ。普段のテ

ンションだとそうでもないのよ?」

「僕は別にどっちでもいいよ」

「こういうのは愛称なのよ、愛称。そういうわけで、私でも大丈夫だったんだからあな……愚弟も大丈夫よ」

「また言い直したね? とりあえず、やるだけやってみます。駄目そうになったらその時に対処考えますし」

「前向きで大変結構ですね、期待していますよ。フッフ」

語尾が不安だ、と思いながらネギは自分のコップに残る紅茶を飲み干した。

アルと別れ、図書館島を後にすると太陽が沈み始めていた。随分長居してしまつたと反省しながら、ネギは明日からの事を思う。

先生をする事の大変さは、数ヶ月程調べてよくわかっていているつもりだ。その為に事前に担当する予定の教科である英語の教科書を手に入れて、一通り読み込んである。問題を出す場合、質問されそうな事も考えてはあるが、やはり不安だ。

その不安の元は、やはり自分がまだまだ子供だという事実によるものだ。

……侮られたりするんだろうなあ。

年下の、十歳にも満たない子供が教師としてくるのだから当然だろう。そう思うと益々気が重くなる。

「愚弟、どうしたの」

前を歩いていた姉が、いつの間にかこちらを振り向いていた。ネ

ギは、実はね、と不安に思っている事を正直に打ち明ける。

「ああ、なるほど。確かにうちのクラスは遠慮しないから厳しいかもしれないわねえ。多分最初の一週間は何いってもかゝわいゝって言われて授業にならない可能性があるわね」

「うう、やだなあ。何かいいアイディアない？そのクラスの急所とかさ……！」

「ハンティングでもする気？　そうねえ……」

未来は頬に手を当てて黙考、そして数秒後、表情を笑顔にかえて両手を叩く。

「いい事思いついたわ。貴方、子供だから侮られるの嫌なんでしょう？」

「まあ、そういう事だね」

「じゃあ、いい考えがあるわ。姉を崇めるなら教えてあげましょう、貴方が子供でも周りがそう扱わなくなる裏技を、ね」

いつて、未来はウィンク。それを見たネギは、何か嫌な事が起こりそうだと感じていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6424u/>

---

愛と勇気の騒楽話

2011年12月1日16時54分発行